

読者のページ

文書管理に思うこと

総務局 伊藤 秀明

机上の多量な文書の山、キャビネットの中の乱雑な書類、足を踏入れることのできない書庫こんな状況は市役所の随所に見られる光景である。情報公開が検討されるにつけ、文書管理の見直しが最重要課題とされ職員

の意識改革が強く叫ばれているところである。文書の近代的、科学的な管理を進めていくには、編さん方法、検索システムの検討、保管・保存スペース等執務環境の整備廃棄の励行などたくさん課題を抱えているが、最近気になっていることがある。

その一つは、文書の発生量が余りにも多過ぎるということである。必要以上に文書を作成

し、同一文書を重複して多くの職員が保有している状況は誰でも経験のことと思われる。その要因は複写技術・印刷技術の向上によりたやすく文書作成できることにもあるのだが、役所には何ごとにつけ文書を作成し、自ら保有したいという、文書至上主義みたいなものがあって、これが文書量の増大に拍車をかけ、本当に重要な文書の適正管理のボトルネックになっているのではないだろうか。まさに、「悪貨は良貨を駆逐する」のとえのとおりである。文書発生量の抑制はまず第一に考えられなければならないことである。

その二つは、文書は結果を記録したものとしてしか管理されていないことである（記録だけに意味がある文書ももちろんたくさんある）。適正管理を強く叫んで意識改革を強調してみても文書の利用価値が低くては、精神論で終ってしまいうらう。文書は情報としての意味があり、多くの利用に供されるとするならば適正管理されるはずである。その意味では局単位、課単位、もっとオーバーに

言えば職員単位で進められていく仕事のあり方は反省すべきときかもしれない。セクシヨナリズムを廃し、常に役所全体の中で仕事を考えていく姿勢が必要となってくる。行政システムの改革と適正な文書管理とは切離せない問題ではなからうか。

都市の生活について

企画財政局 前田 清隆

私は今年の正月をインドで迎えた。もちろん短い滞在の期間中では人々の生活を垣間見ることしかできないのだが強烈な印象を受けた。インドの都市問題、とりわけ人口の急激な集中から起こる住宅問題は深刻であるが、人々の生活は極めて自然である。つまり人も動物も自然の一部として、自然と共に生きているのだ。永々と続くインド数千年の歴史の一コマを生きているように思えた。

さて、横浜での私の生活はいえはきわめて無機的である。鉄筋コンクリートの一DKのアパートで目を覚まし、アスファルトで舗装された道路を、車の洪水と排気ガスでむせかえりな

がら駅に向う。自動販売機で切符を買い、これまた自動の改札口を通り満員の地下鉄に乗って職場に到着するのである。そこで休日にはこんな環境から抜け出して緑や水や澄みきった空気を吸いたいたいと思うのだが、目的地はまた速い。これとは対照的に「物」はあふれるほどである。色とりどりの商品が購買欲をかきたてる。しかしこの「豊かさ」とは一体何だろう。我国は穀物の約七〇%、エネルギーの約九〇%を輸入によっている。これらのバランスの上に私の生活はある。今、世界の約一〇%の人々が飢え、約二〇%の人々が飢餓線上にあるというのだ。エントロピーの理論からもゆゆしき問題である。つまり諸々のエネルギーを消費するこ

とではエンロピーの増大をもたらし地球的規模で考えなくてはならない資源を消費しているのである。都市の生活は利便をもたらしてはいるが、もう一度それを見直す必要があるのではないか。不便さをもう一度生活に取り込んでいく必要があるのではないか。本当の「豊かさ」とは何かを考え直す必要があるのではないかと最近つくづく思っている。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

へあとがき）
若い世代を中心に、市職員の生きがいは、仕事中心から趣味・教養へと変化しつつある。OA化の波が、この傾向にどのように影響するかも興味深い。自主研究活動が、趣味の域を出ない単なる勉強なのか、その

成果を行政に反映できるものなのか。評価は人さまざまであるが、少なくとも、E仲間と共に知的興奮をわかちあい、自己啓発をする前向きな姿勢を評価願いたい。二十一世紀には、その果実がたわわに実ることを楽しみに……。 <下嶋>